

学校はかつて地域文化の中心であった

かつては学校は地域文化の中心であり、発信地でもありました。

私の初任は昭和47年ですが、新任校の小さな小学校に当時オープンリールの巨大なビデオデッキが教材備品として導入されました。当時の価格で乗用車1台分と記憶しています。デッキのみですので、専^{もっぱ}らNHKの教育番組を録画して子どもたちに視聴させるという使い方でした。当時はまだどの家庭をみてもビデオカメラはもちろんのことそれを再生するビデオデッキも存在しませんでした。

一方、学校は地域公民館の役割も併せもっていました。印刷機械をもつ公的機関は町役場か学校にしかなかったので公民館主事はしょっちゅう学校に出入りしていました。初任の私はよく主事から地域行事にさそわれました。青年団行事はもちろんのこと、週末の老人会の囲碁教室、新年の婦人会かるた(百人一首)大会、月1回地域の子どもたちを集めて行う学校の隣にあるお寺さんのお経教室にまで参加しました。私の家は禅宗ですがこのおかげで^{しょうしんげ}正信偈は読めます。学校の教師というより地域の青年団員といったほうがよかったかもしれません。

さて、当時のビデオデッキにしる^{こんにち}今日のコンピュータにしる時代はちがっても大変高価なものです。ただ明らかに違うのは今日の学校はかつてのように地域の中で最新の施設設備や機器に恵まれた最先端施設ではなくなっているということです。

確かに本校もようやく生徒一人にほぼ1台のコンピュータ(2年生はまだ足りない)充足となりましたが、家庭におけるコンピュータの普及は学校の比ではありません。デジタル機器をみても家庭(生徒)は学校をはるかに越えています。生徒は家にはMDデッキを備え、外出時にはHDプレーヤー(iPodなど)やI Cプレーヤーを耳にあてます。高校生にいたってはもれなくカメラ付き携帯電話(テレビまで見られるものもある)を所持しています。学校は未だにカセットテープデッキが主流です。

だから、学校は文化の中心ではなくなったし、発信する情報もないというつもりは全くありません。しかし、学校や教師がかつてのように地域と一体化したものではなくなっているように思えてなりません。そのことが現在の学校教育に何らかの影響を与えているのかいないのか…？

